

巻頭言

わが研究への思い

SASJ 会員の研究者は若い人が多いので、何か参考になればと思い、今までの自分の研究への思いを書いてみました。

我が研究の出発点は、大学2年時米国帰りの新任先生の量子化学講義を聴いて、将来はこれを専門にしたいと思った。通っていた私大（理大）には、基礎分野は無く、自分の希望の道に進むには他の大学院を選ぶ必要があったが、学部時代は遊んでしまったので、自分のいい加減さを反省し、4年時物理化学に磨きをかけたく色々量子化学を読んだ。その量子化学の中で自分の師となる青野茂行先生（後金沢大学長）の研究が引用されていたのを見て、志望を金沢とした。

金沢大の研究室は先生4人と学生8人という恵まれた研究環境で、青野先生は教育熱心で量子力学を中心に週4日は午前か午後は2~3時間輪講を行った。学生は週1度はどれかに当たるので式の誘導はできても、physical picture まで理解するには至らなかった。輪講の1つでは、Pople や McLachlan の量子化学分野の original papers を徹底して勉強したことは、後の自分の研究への指針になった。

博士課程は青野先生の紹介で京大の米澤貞次郎先生の研究室に移り、そこでは国際的な研究論文を発表するのが当然という活発な環境（同時代の仲間には中辻博さんや平尾公彦さんが居た）であった。1年目に書いた磁気共鳴における核の化学遮蔽に関する理論的研究が、米国の磁気共鳴の大先生に認められ、自分が研究という職でやって行けるという大きな自信に繋がった。京都で学んだことは、研究の纏めは少なくとも必ず英語で論文を書き Journal に掲載することであった。

磁気共鳴メーカー（ドイツ）や私大講師など6年を経て、紙メーカーで18年、記録材料の開発（ハロゲン化銀写真材料を9年）や解析研究（磁気記録、感熱・感圧記録、有機半導体記録材料）を行ったが、「これは大学の研究、これは企業の研究」と区別をつけず、英語の論文に纏めて Journal に掲載することを心がけた。その中の高分子の電子状態に関する表面解析の論文を読んでもくれた UBC の Chong 先生（量子化学）の手紙で、共同研究を開始した。それがわが半生を過ぎた時だった。その後、縁あって金沢大理学部へ赴任し、量子化学、磁気共鳴、電子分光などを用いた固体の内部並びに表面構造や状態変化の教育研究を行っている。

最後に SASJ の若い人たちに述べておきたいこととして、恩師の米沢先生、永田先生が書かれた「ノーベル賞の周辺」の中から、「日本の研究者は孤独になることを極端に恐れ、皆と同じことをしていると安心しているように見えるが、フランスでは皆と同じことをするのを最も嫌い、他人と違ったことをやりたがる（永田先生へのフランスの若い研究者の言）」や福井先生の言「数多くの文献を読み、それを整理蓄積するタイプの勉強に関心をもたなかった。文献を読むならすぐれた論文を選び、それを徹底して読むように薦めた。」は、同感である。また、独創的人間に必要な素養とは、「①科学に興味をもち、研究が好きであること。②世俗的な栄誉や利益と独創的研究は相容れない。③好奇心、文献の読み方、主流よりも反主流が大切である。」は重要であろう。

金沢大学 遠藤一央